マンガ評論新人賞
入選作品発表!!

奨励賞　阿部幸弘（賞金10万円）
「『寄生獣』と共感性について」

参考作品　藤田嘉昭
「線の楽園―安部慎一論―」

銓衡総評

昨年十二月で締切られたマンガ評論新人賞応募原稿は、総数で十七作品。第一回目としてはまずまずの応募数であった。このうち、編集部の手によって十作品がふるい落とされ、七作品が委員による銓衡の対象となった。ふるい落とされた作品は、後で私も目を通してみたが、いずれも構成や論旨に大きな破綻があり、ふるいおとされるのもやむをえないと思った。

最終銓衡の対象となった七作品については、委員全員が目を通し、二月九日に協議を行った。最終銓衡の方法は、まず、各委員が原稿に三段階の評点をつけ、全作品について評点の理由を述べる。次に、評点の高かったものについて意見を出し合い、最終的な決定をした。個々の原稿についての判定は、各委員の選評に譲る。

その他に、米澤嘉博氏より、規定の原稿枚数の下限が多すぎるのではないかとの意見がだされた。テーマによっては二十枚ほどのひきしまった原稿の方がいいという理由からである。確かに、今回の応募原稿の中には無理に量をふやしたようなものもあったし、次回以降、下限は二十枚程度とする。

今回は奨励賞を一作選出することができた。これが呼び水となって次回からさらに高水準の作品を選出できるようにしたい。

委員代表　呉　智英

選評

呉 智英

村上知彦

米澤嘉博

呉 智英

最終銓衡の対象となった七作品のうち、好印象を受けたのは、阿部幸弘の『「寄生獣」と共感性について』である。

理由は、今マンガ評論に求められている二つの見識、すなわち、マンガについての知識と文化一般についての見解が一応の水準に達していたからである。前者のみあってもマニアかオタクにすぎないし、後者のみあってもむろんマンガは論じられない。この点で、阿部氏は最低限の基準を超えている。

しかし、奨励賞にとどめた。その理由は、一つは文体に不満があったからである。時々、口語調の軽い表現が出てくる。これは使い方によってはきわめて効果的になるが、不用意に使うと聞いている方が困るクサイ冗談のようになる。この原稿では後者である。正攻法のしっかりした文章でいった方がいい。第二に、阿部氏の職業である。精神科医なら、これぐらいのものを書いて当然であろう。いや、精神科医なら片手間にいかにも書きそうであるとさえ言っていい。精神科医の教養がいけないと言うのではない。精神科医だろうと漁師だろうと外交官だろうと力士だろうと、職業上の専門的知識を生かすのはむしろいいことである。ただ、その職業の人なら誰でも（というのは言い過ぎだが）書きそうなことを書くのなら、それは単なる業務記録である。以上二点に不満はあるが、奨励賞には十分ふさわしい。

残りの六作についても、寸評しておこう。

○ＪＯＳＥＦ・Ｋ『特殊マンガ家の知性』

図式による裁断は評論ではない。誤字を摘発するのもけっこうだが（かく言う私も好きである）、どういう立場で何のためにやるのかが明らかでないと、教養に何の懐疑も抱かない俗物教養主義に陥る。ペンネームもよろしくない。

○和田光太郎『松本大洋論』

論じたいことがはっきりしないような気がする。松本大洋をテーマにしたことは面白いように見えるが、読んでいても論者の必然性が浮かんでこない。

○藤田嘉昭『線の楽園』

六〇年代にマイナー系知識人の間で流行した（通用した）文体である。「そうした読解を強いることこそ安部の独自性であったが読者はその通過儀礼を経たのち時間が単なる線ではなく可逆的であり可分岐的であるという至福の認識を得たのである」（応募時の原稿のまま）――これは一体何のことか。一度英語に翻訳して、もう一度日本語に訳してみるといい。わかりやすい日本語になる。わかりやすい日本語になったとたんアリガタミがなくなったとしたら、それは内容自体にアリガタミがないのだ。

○山内勝博『根本敬の芸術』

着眼も展開もよく、まとまりもあった。しかし、これは根本敬を知らない人や理解しない人に対する紹介・解説のレベルである。これを超えなければ評論にはならない。

○川崎浩司『永島マンガの原点と変遷』

永島マンガへの愛着がよく出ているが、それを告白しただけでは評論ではない。なぜそれだけ愛着があるのかが述べられていれば、少なくともエッセ

イとしては面白くなったと思う。

○白戸川洋一『世紀末の路頭に迷う海月のために』

花輪作品の解説と文芸趣味のエッセイが融合しないままのように思えた。この文芸趣味も、もう滅びつつあるものだ。花輪を論じるのなら、もっと本腰をいれた方がよいと思う。

村上知彦

以前、まんが情報誌『コミックボックス』で、やはり呉智英氏の提唱による同様の評論新人賞の選考に加わっていた。舞台を『ガロ』に移しての第一回である今回の、最終選考に残った、応募作をみてまず思ったのは、いかにも『ガロ』らしい作品が集まったな、ということだった。なにしろ論じている対象が根本敬、花輪和一、永島慎二、安部慎一である。新しいところでは、松本大洋、岩明均が取り上げられているが、それもまたどこか『ガロ』読者が好みそうな作品と言えなくもない。

『コミックボックス』の時と決定的に違っているのは、少女まんがやアニメへの言及が見られないという点である。応募者の年齢も相対的に高いし、なにより女性がいない。そのことは『ガロ』においてまんが評論の新人賞を設けることの、意味と限界をはからずも指し示しているようにぼくには思える。

『コミックボックス』での経験とくらべても、今回最終選考に残った応募作のレベルは低くない。なにより、好みの作品への感覚的な賛辞を描き連ねたような、評論としての基本的なスタンスをわきまえない作品はみられない。それぞれ巧拙はあるものの、一応は冷静で客観的な論理の展開と、批評的視点を備えているように感じられた。ミーハー的でないぶん、腰がすわっている。

ただそのことは、応募作を全体としてみたときに感じる、幅の狭さ、時代との関わりの気薄さの印象と、実は裏表なのかもしれない。『ガロ』というフィルターを外してみた場合、なぜいまその作家や作品を論じなければならないかという切実さが見えてこないのだ。応募者の年齢が高いこと、女性がいないことが、その点ではマイナスに働いているようなきがする。論じる対象の古い新しいではなく、それがどのようにかいまに関わっているその接点においてつかまえるのでなければ、それは『ガロ』という狭いサロンの中だけで通用する、仲間うちの繰り言になってしまうだろう。

奨励賞となった阿部弘幸「『寄生獣』と共感性について」は、現実と虚構との混乱という極めて現代的な主題に取り組んでいる。その点で、今回の応募作の中では唯一、論旨そのものに対する積極的関心をもって読み進めることができた。岩明均が『アフタヌーン』に連載中の長編「寄生獣」を中心に、同じ作者の短編集「骨の音」、林静一「PH4.5グッピーは死なない」、石井隆「魔楽」、駕篭真太郎「人間以上」、士郎政宗「功殻機動隊」、水上硯「マイペースな人々」など、多彩な作品を引用しながら、〈身体性〉〈共感性〉といったキーワードで、まんがに現れたこの現代的課題への回答を読み解いてゆく。

そのアプローチは、新鮮とまではいえないが手堅く着実であり、読むものにある種の納得をもたらす視点の確かさを備えている。ただ、結論部分でそれまでも散見された文章のしまりのなさ、おそらくある種の照れからくる論理的構成の不徹底と、わざと軽い表現へ逃げ込むくせが顔を出し、読後の印象を弱くしてしまったのが惜しまれる。いずれにせよ『ガロ』の読者にとっても切実であるはずの主題を、幅広い目配りで同時代のまんが作品全体の中に位置づけてみせた作者の力量は、充分受賞に値する。今回は奨励賞にとどまったが、今後の活躍への期待をこめたものと受け取ってもらえればありがたい。

その他では、藤田嘉昭「線の楽園―安部慎一論―」、和田光太郎「松本大洋論―花と星―」、白戸川洋一「世紀末の路頭に迷う海月のために・花輪和一ノート」の三つが気になった。「線の楽園」は、安部慎一作品を精緻に分析した労作だが、論の前提となる石井隆の映画「死んでもいい」への言及がいささか長すぎてバランスを欠き、実はこちらが書きたかったのではと疑わせる。佳作にはやや及ばないが、参考作として一部を抄録すべきとの結論になった。『ガロ』における評論新人賞の役割として、かつての『ガロ』作品を、現在の目から再評価するというのも重要な部分であろうと考える。その一定の水準を、この作品が示していると思えたからである。

「松本大洋論」は、良くも悪くも松本大洋という作家の発する磁力に引きずられた作品だ。興味ある視点を多数提示しながら、それが「論」としてうまくまとまっていかないため、結果として混乱した印象を与える。「さて、一体どうなりますことやら」という、投げやりな結語は、ここから何ごとかを受け取ろうという気分をいちどに萎えさせる。「世紀末の路頭に迷う海月のために」は、花輪和一の初期作品のみを扱い、現在に全く触れていない点が気になった。作家論としては公正さを欠き、恣意的な読み取りにすぎないといわれてもやむをえないだろう。寺山修

司、山田勇男、湊谷夢吉らとからめてのイメージ論の展開には興味深い点もあるだけに惜しい。
山内勝博「根本敬の芸術」、川崎浩司「永島マンガの原点と変遷」は、評論というより解説に近いものである。技術的には「根本敬の芸術」にやや高い評価を与える声もあったが、作家の世界を全面肯定したうえで賛辞を捧げるその立場は同質のものであると考え、同等の評価となった。残るJOSEF・K「特殊マンガ家の知性」は、新聞の投書のようなものだ。誤字、差別表現などに関する丸尾末広、山野一、根本敬、平口広美らへの批判である。ただ、その批判はなにも生みださない。単なる全否定であり、自らの「知性」の証明であるにすぎない。批判はもちろん重要である。ただし、批判することが重要なのではなく、批判によって何を語ろうとしているかが重要なのである。

米澤嘉博

募集媒体が『ガロ』に変わったこともあって、前回とは応募原稿の内容、質が大きく変化した。少年マンガ、少女マンガ、アニメを扱ったものは一本もなく、『ガロ』系作家に対象が集中したのは予想通りだったとはいえ、『C・B』期との大きな違いには、ちょっとした不安を感じた。――雑誌による読者の住み分けは、思いの他進行しているようだ。『なかよし』と『ガロ』と『ペンギンクラブ』と『少年ジャンプ』を一緒に読む奴なんか、もう何処にもいないのだろう。
「マンガ読者（ファン）」の一言で括れるような状況でない。それはわかっていたことだ。別に何を対象に、素材に選ぼうと関係はない。にしても、常に動き続け、広がり続けているマンガという、変容し続ける不定形の表現を相手にする場合、あまり、ある時間の中に停まっていて欲しくはない。アグレッツィブであって欲しいし、守るべきテリトリーなぞないと自覚して欲しい気もする。
だから、それ故に『寄生獣』と共感性について」に『奨励賞』を与えることに異論はなかった。メジャー誌の人気作品を扱っていたからではなく、身体性と共感性という今日的な問題とマンガの虚構と現実をからめた論が刺激的であったからだ。手さぐりで書いており、気取らないスタイルも好感が持てた。また、目配りも確かであり、「今」という時点でのマンガに触れているという手応えもあった。なんといっても、この人だけが、他の作家についても書けるという予感を抱かせたことが大きい。
「松本大洋論」は、引用、記号といったところを中心にスタイル論を展開しており、目のつけどころはなかなか面白かったが、断章の寄せ集めという感じで、全体的な構成力に欠けていた。結びもとってつけたようで、投げ出してしまっている。整理し、焦点を絞り、まとまりをつければ、これはこれで面白いと思う。
「線の楽園」「花輪和一ノート」の二本は七〇年代のある時間の特定の作家について語ったものだ。既製の映画評、寺山修司といった元になるスタイルが透けて見えるものの、それなりに二人共書き慣れており、読める。特に安部慎一論は、分析としてはまとまっており、一定の質を見せている。ただ、半分以上を占める石井隆や映画についての論が、安部慎一論と有機的に、からんでいるとは読めず、時折の言い回しに引っかかるところが気になった。また、「永島マンガの原点と変遷」については、長年の熱心な読者らしく、よく読んでいるが、書き手と永島マンガの位置関係がわからず、単なる解説に終わっている。永島マンガにおいては、何故に永島慎二にひかれていったかという、私性の表明が読みたかった。
この三本は、ある意味、七〇年代で興味は終わっており、完結している。そのことをとやかく言う気はないが、応募原稿以上の展開があるとは思われず、点はからくなった。
「特殊マンガ家の知性」は、誤字への言及、フェミニズム、差別といった面から、マンガに規範を求めており、マンガの「感性」の否定を展開している。確かに、ここには問題がある。だが、こういった裁断の仕方は、PTAの「有害」図書批定と似たりよったりだ。一方、「根本敬の芸術」は、そのまったく逆の立場からの根本マンガへのオマージュだ。ただこれも、寄って立つ場所を明確にせぬまま、一般の論理や感情に対抗しようとしても説得力はない。特殊性と芸術性はイコールではない。根本の無秩序によるリアルの暴力性は、何故に不快であり、心地良いのかを自己分析していくところから始めていくべきだと、ぼくは思う。
語りたいという欲求がまずあってほしい。そして消費し続けることへの無節操さ。後生大事に一人の作家、一つの作品を抱き続けることはファンとしては正しいことかもしれないが、言葉によってマンガを語り直さんとする者には、別のスタンスが必要だと思う。それは、面白さ、面白がることへの貪欲さであり、とどまるまいとする、姿勢の問題だろう。次回は、より刺激的な評論に出会いたいのだから…。